

鳥の声

古人に言あり、“鳥を以て春に鳴く”と*。今はもう春分を過ぎ、まさに鳥の声の季節となった。だがわたしはあまり聞こえないように思う。京城の西北隅はすでに農村に近いのだけれども。このいわゆる鳥とは当然あの悲鳴自在のものを指し、鶏がコーコーと鳴くのや家鴨がガアガアと鳴くなど家畜は言うまでもなく、よく馴れた鳩の類も数には入らない。というのは彼らはみな四時八節を忘れてしまっているからである。わたしが聞く鳥の声はただ軒端の雀のちゅうちゅういうのや、それに槐の木の上に毎日朝から来るキツツキの乾いた笑い、——これらはいずれも春の知らせにはならないようだ。雀はあまりに細々しすぎるし、キツツキは又ちょっと乾いた気味が多いようだ。

イギリスの詩人ナッシュ (Nash) に詩が一首あり、いわゆる『名詩選』 (Golden Treasury) の巻首に採られている。彼は言う、春が来た、花々は咲き、娘たちは踊る、天気は温和、鳥たちも皆歌い出す、と。彼は四種の鳥の声を列挙している。

Cuckoo, jug-jug, pee-wee, to-witta-woo!

この九行の詩は実に面白いが、わたしは敢えて訳さない。というのは一に下手な訳が怖い、二に誤訳が怖いからである。今一行だけ書き写し、四種がどんな鳥か見てみよう。第一は鈴懸バトで、書名は鳴鳩で、彼は自分でその名を呼ぶことは、疑いない。第二はナイチンゲール、つまりかの林間の“痴れ鳥”で、古代ギリシアの女詩人はそれを“春の使者、美しい音の夜の鶯”と称した。彼の名貴や想うべしである。ただわたしはそれが一体どんなものか知らない。わたしたちの田舎の黄鶯も“宙返り鳴き”をすることができ、捕まった後はいつも妻子を想って急死するのは、西方の従兄弟たちと同じだが、彼は小鳥を食うのである。そして又痴れたように一夜を鳴き明かして血を吐くことはない。第四は怪しげなようだがふくろうである。第三はあまりはつきりしない。蚊食い鳥と言う人もあるし、田鳧と言う人もあるが、スミスの『鳥の生活と物語』第一章に言うところによれば小ふくろうである。もし本当なら、四種の好い鳥のうちふくろう一家がその二をも占めることになる。スミスはこの二つはともに褐色のふくろうで、ほかの怪声怪相のとは違うと言う。彼の書物には図像があるのだけれども、わたしにはそれが鶇なのか鶇なのかそれとも流離の子なのか見分けがつかない。だが要するにふくろうの類なのだろう。子どものころ彼らの鳴き声を聞いて、あるものは雑貨売りの振り太鼓のような声、あるものはまるで“掘窟” (dzhuehuoang) [穴掘れ] を連呼しているようで、俗に不祥、主に死喪ありと云うので、聞いた者は多くがとても気に病む。おそらくこの風習は昔からあったものだろう。観類 道人の『小演雅』を調べると、記録した古今の禽言の中にはふくろうの話は見えない。しかしながら仔細に回想すると、そうした鳴き声は実際は決して間違っておらず、どんな風の音、笛の音、鳥の声よりも面白いのは、詩人シェリー (Shelley) の言う通りである。

いま、北京について言えば、こうしたいくつかの鳴き声はどれもなく、あるのはやっぱり雀とキツツキだけである。鳥は、いなかでは老鴉と称し、北京では毎日聞くことができるが、少しの風雅の気もない。しかも年がら年中喧しく、いったいどの季節の鳥かわからない。雀とキツツ

キはよい歌は歌えないけれども、その細々したそして枯れたなかにも結局は少し春の気を含んでいる。ああ～あ、あの可愛気のない鳥の声は聞き飽きた。しばらくこれらの春を鳴く小鳥を歓迎し、彼らの談笑に耳を傾けようではないか。

“ちゅう、ちゅう！”

“かっかつ！”

（民国十四年四月）

※初出：1925年4月6日『語絲』第21期

*韓愈「孟東野を送る序」 鳥を以って春に鳴き、雷を以って夏に鳴き、虫を以って秋に鳴き、風を以って冬に鳴く。